「注文できないレストラン」

伊藤貴晴　作

【登場人物】

男１ 先輩会社員

女１ 後輩会社員

女２ アルバイト

女３ 店長

【１】

 レストラン。男１・女１がいる。

女１ 今日は誘ってくれてありがとうございました

男１ いやいや。たまたまサーカスの割引チケットをもらったからさ。サーカスなんて全然見たことないんだけど、せっかくだから行ってみようと思ってさ。で、せっかくだから一緒に行けたらいいかなって、いや、そんな深い意味があるわけじゃなくて、仕事の息抜きになればいいなって

女１ とっても楽しかったです。私、サーカスって初めて見ました

男１ 僕もだよ。いや、サーカスはすごいね。あんなに大きなテントを立てて、綱渡りとか空中ブランコとか、僕がやったら落ちて死んじゃうよね。ライオンや熊もいてさ。僕がやったら食べられちゃうよね。それからあれ、自転車に１０人くらい乗るやつ。僕がやったら道路交通法違反で捕まっちゃうよね

女１ そうですね

男１ 明日からまた仕事頑張ろうね

女１ はい

男１ いやあ、今日は楽しかった

女１ このお店、知ってるところですか？

男１ いや、たまたま見つけたから入ってみたんだけど

女１ そうなんですね

男１ お腹空いたでしょ

女１ はい

男１ ここ、多分、個人経営のレストランでしょ。こういうところはきっとおいしいんだよ

女１ そうなんですね

男１ おごるから

女１ ありがとうございます。でも、店員さんがいないんですけど

男１ そうだね

女１ どうしたんでしょう

男１ 何かあったのかな？

女１ 何があったんですか？

男１ いや、分かんないけど

女１ 他にお客さんもいないですよ

男１ そうだよね。とりあえずメニュー見ようか

女１ 「シェフのきまぐれコース」

男１ それだけ？

女１ それだけです

男１ 中身が全然分からないな

女１ ちょっと怖いですね

男１ いや、これは期待できるよ。シェフのこだわりを感じるよね

女１ そうなんですね

男１ 『注文の多い料理店』と真逆だね

女１ 『注文の多い料理店』？

男１ 知ってる？

女１ 宮沢賢治ですか？

男１ そうそう

女１ 読んだことないです

男１ そうなんだ

女１ お客さんからの注文が細かすぎて、シェフが鬱になって発狂する話ですか？

男１ いや、違うよ。レストランからお客さんに対しての注文が多いんだよ

女１ こだわりのラーメン屋みたいな感じですか？

男１ どんな感じ？

女１ まずはスープを味わえ。調味料をかけるな。トッピングをのせるな。麺は音を立ててすすれ。無言で食え。スープは飲み干せ

男１ ああ、なるほど

女１ そういう面倒臭いお店なんですね

男１ 違うよ。実は山猫がお客さんを食べようとしてるっていう話なんだ

女１ 先輩、ネタバレです

男１ ごめん。でも有名な話だから

女１ そのうち読んでみます

男１ ここもそういうレストランだったらおもしろいよね

女１ 嫌ですよ。食べられちゃいますよ

男１ そっか。そうだね

女１ 確かにこのレストランは真逆ですね。お店からまったく注文されない

男１ そして僕らも注文できない

女１ 注文できないレストランですね

男１ （店員を呼ぶ）すみません

女１ 返事がないですね

男１ （店員を呼ぶ）すみません

 女２・女３、登場。

女２ 店長、私、今日でバイト辞めます

女３ 待ってよ。困るよ

女２ だったらバイト代払ってください

女３ 払う。払うから、もうちょっと待って

女２ いつまで待てばいいんですか。このままじゃ私、タダ働きじゃないですか。早く先月のバイト代払ってください

女３ 分かったから落ち着いて

女２ 落ち着いていられないですよ。待ってくれって言いますけど、待ってたらバイト代払えるんですか？　いつもガラガラで売り上げ全然ないじゃないですか。店は開ければ開けるだけ赤字じゃないですか

女３ そうなんだけど、これから何とかするから

女２ どうやって？

女３ ほら、お客さんも来てるし

女２ 貧乏臭い若者２人だけじゃないですか。こんなのじゃ私の今日のバイト代にもなりませんよ

男１ 貧乏臭いって言われたよ

女１ 別のお店にしましょうか

女３ ちょっと待ってください。せっかく来たんだから食べて行ってください

男１ いや、取り込み中のようですので

女３ 大丈夫です

女２ 大丈夫じゃないです。私がいないとホールスタッフいませんから。接客する人間いません

女３ それじゃ困るよ

女２ 私だって困ってるんです。ほら、この人達だって困ってますよ。みんな困ってます

男１ それじゃ、我々はこれで

女３ ちょっと待ってください。話だけでも聞いてください

男１ 嫌ですよ

女３ 何でですか

男１ こっちは食事に来てるんですよ。面倒なことに関わりたくないんです

女１ でもちょっとかわいそう

女３ そうでしょう。かわいそうでしょう。私、結構かわいそうな人間で

女１ いえ、そちらのアルバイトの彼女。給料がもらえてないんでしょ。かわいそう

女２ ですよね。私の方が断然かわいそうです

女３ 私だってかわいそうだよ

女２ 店長は人に迷惑をかけている自覚を持ってください

女１ 給料が払えないんですか？

女３ そうなんです

女１ どうして？

女２ 売り上げが全然ないんです

女１ どうして？

女２ お客さんが全然来ないんです

女１ どうして？

女２ それを説明するのは難しいんですが

男１ 料理がおいしくないの？

女２ いえ、料理だけはおいしいです

女３ だけ？

女２ 店長、プライド高いクズなんですよ

女３ クズじゃないよ

男１ どういうこと？

女２ まず、メニューがありません

女１ 「シェフのきまぐれ」

女２ そうです

女３ 元々ね、お客さんが何を食べたいのかを聞いて、それを即興で作るっていう、ジャズセッションみたいなレストランっていうのがコンセプトなの。だからメニューはないし、何を作るかはその時になってみないと分からない

女２ そんな感じなので、そもそも１組しか入れないんですよ。だから２組目以降は断るしかなくて、なかなかお客さんが定着しなくて。かといってお客さんが来ない日は全然来ないです。それに、店長よくお客さんとケンカするんです

女３ ケンカじゃないよ

女２ ケンカっていうか、よくお客さんを怒らせるんですよ。お客さんの話聞かないで作りたい料理を勝手に作ったり、余った食材を無理矢理食べさせたり

女３ それはよかれと思ってやってるんだよ

女２ それが本当にいいことなら、「２度と来ない」なんて言われませんよ

女１ プライド高いっていうか、自分勝手なんですね

女２ だから店長に接客任せられないんですよ。料金設定も滅茶苦茶ですから

男１ じゃあ誰がこの店を仕切ってるの？

女２ 私です

男１ え？

女２ 私が、お客さんの要望聞いて、店長に作る料理指示して、価格も私が決めてます

男１ バイトなのに？

女２ バイトなのに

女１ すごいですね

女３ そう。彼女はなくてはならない存在なんだ

女２ でも給料もらえないんです

男１ 最低だな

女１ 最低ですね

女３ かわいそうでしょ

男１ あんたが偉そうに言うなよ

女３ ごめんなさい

男１ じゃあ他の店に行こうか

女３ え？　何で？

男１ だって今日はもう注文できないんでしょ？

女３ え？　何で？

女２ 私もう仕事辞めましたから

女３ まだ辞めてないよ

女２ 少なくとも給料もらえないなら仕事じゃないですから

女３ 注文取ってきてよ

女２ 嫌です

男１ ほら

女１ でも料理はおいしいんですよね？

男１ え？

女２ はい

女１ 食べてみたいです

男１ 確かに

女１ 店長が自分で注文取れないんですか？

女３ 取れないんです

男１ 注文取れないってどういうことですか？

女３ やってみますか？

男１ はい

女３ 何が食べたいのか言ってみな

男１ 偉そうだ

女３ 何でも食わせてやる

男１ ハンバーグとエビフライが食べたいです

女３ ハンバーグとエビフライだと？　そんなチンケな料理を私に作らせるのか？

男１ いや、洋食が食べたかったんですけど

女３ ハンバーグとエビフライなんて子供の食べ物だろ。分かったよ。子供が好きな寿司にしてやる。ハンバーグとエビフライの軍艦巻きだ

男１ いや、そういうのは求めてないんですけど

女３ 私の飯が食えないってのか

男１ いや、そういうことじゃなくて、本格的な洋食を食べたくて

女３ 子供でも食べられるハンバーグ作ってやるよ

男１ いや、食べるのは子供じゃなくて僕で

女３ うるせえ。私に命令するな

男１ ダメだ

女２ ほら、ダメでしょ

女１ ダメですね

女２ お客さんの前だと緊張してキャラが変わるんです

男１ あれ、緊張なの？

女３ いや、お恥ずかしい

女１ ポンコツですね

女３ 面目ない

女１ やっぱりこっちの彼女が必要ですね

女２ 給料もらえないと働きませんよ

女１ じゃあ、今日の売り上げで今日の分の給料が払えるならどうですか？

女２ え？

女１ 私達が料理を注文して、お金を支払って、その中からバイト代を直接渡せば、少なくとも今日は給料がもらえます

女３ それがいい

男１ でも僕達の食事代でバイト代になるかな。貧乏臭い若者だからな

女２ すみませんでした。訂正します。貧乏臭いおじさんとかわいいお姉さん

男１ それ、僕だけひどいことになってるよね

女２ 幸（さち）薄そうなおじさん

男１ おじさんはやめて

女２ 貧乏なお兄さん

男１ 今日はちゃんとお金持ってきてるよ

女１ 先輩はそのお金を払ってください

男１ え？

女１ 彼女の給料に見合う料理を作ってもらって、先輩が彼女の給料分の代金を払ってください

男１ え？　僕が？

女１ おごってくれるんですよね

男１ いくらぐらい？

女１ 時給いくらですか？

女３ 時給は１２００円にアップする

男１ 勝手にアップするな

女１ 今日は何時間ですか？

女２ ８時間です

男１ そんなに働いてるの？

女２ そうなんですよ。客も来ないのに

女１ ８時間で９千６百円ですね

男１ 高いな

女２ でもそれじゃ今日の給料しかもらえないんだ

女３ 店の売り上げにもならないし

女１ そうですね。原価や利益を考えて、もう少し価格に上乗せした方がいいですね

男１ そうなの？

女１ このままじゃこの店、潰れちゃいますよ

女３ それは困るな

男１ それ、僕には関係ないよね

女２ 今までの給料も払ってもらわないと

女１ じゃあ今日の価格設定は２万円にしましょう

男１ 高いよ

女１ で、接客の際にチップを求めていいことにしましょう

女２ 本当ですか？　嬉しい

男１ 何それ？

女１ チップです。海外ではよくある仕組みで、サービスを提供する人の直接の収入になるんですよ

男１ それ、僕には何の得もないよね

女２ チップもらえないと、何にもしないよ

男１ 脅されている

女２ いらっしゃいませ。お席にご案内します

男１ あ、そこから始まるのか

女２ テーブルチャージ百円です

男１ そこから金取るのか

女２ お水とおしぼりで２百円です

男１ それも？

女２ メニュー見るのに百円ですけど、見ますか？

男１ どうせ「シェフの気まぐれ」って書いてあるんだろ？

女２ そうです。私が何かする度に百円かかります

男１ 小学生のお手伝いか

女２ 当店はお客様のご要望をお伺いし、シェフがそれに合わせた料理を提供する形になっております。ご要望をお伺いします

女１ 先輩、何が食べたいですか？

男１ １人１万円のコースなんてフランス料理みたいだな。食べたことないよ

女２ フレンチにしますか？

男１ いや、洋食のつもりで入ったから、せっかくなら洋食がいいな

女２ じゃあハンバーグ、エビフライ、ビーフシチューあたりですね

女１ 私、パスタがほしいです

女２ かしこまりました

男１ でもそれだけじゃ２万円にはならないよな

女１ 素材が高級なら、なりますよ

男１ どのぐらい要望に応えてくれるの？

女２ どんな要望にもお応えします。ね、店長

女３ いや、さすがにどんな要望にもっていうのは難しいよ

女２ 店長、店が潰れてもいいんですか

女３ よくない

女２ この店の未来がかかってるんです。真面目にやってください

女３ はい

女２ シェフがどんな要望にもお応えします

女１ ですって

男１ こっちもかなりの金額を搾り取られるんだ。無理難題をふっかけてやろう

女２ 望むところです

女３ 望んでないです

男１ まず、肉料理はＡ５ランクの牛肉を使ってください

女２ できますか？

女３ できます

男１ 魚料理にはふぐ

女２ できますか？

女３ できます

男１ エビフライは伊勢海老でお願いします

女２ できますか？

女３ できます

女１ では私からも。チヂミ、スンドゥブ、プルコギ、トッポギ、サムゲタンをお願いします

女２ 店長、韓国料理で攻めてきました

女３ できます

女２ できるそうです

女１ じゃあ続けていいですか？

女２ どうぞ

女１ ゴーヤチャンプル、ラフテー、テビチ、海ぶどう、サーターアンダギーをお願いします

女２ 店長、沖縄料理で攻めてきました

女３ できます

女２ できるそうです

女１ 先輩、お願いします

男１ 僕？

女１ できないと言わせてください

男１ 目的が変わってきてる

女２ どうですか？　もう終わりですか？

男１ 世界三大珍味、キャビア、フォアグラ、トリュフ

女３ できます

男１ エスカルゴ

女３ できます

男１ ハチの子

女３ できます

男１ 年代物のワイン

女３ できます

男１ 考えろ。何でも対応できるなんて物理的に不可能だ。僕の想像力が彼女を上回れば勝ちだ。考えろ。想像するんだ。誰も思いつかない料理を。分かった。うな重

女３ できます

男１ 負けた

女２ ではご用意いたしますのでしばらくお待ちください

 女２・女３、退場。

女１ いいお店ですね

男１ おいしいかどうかはまだ分からないよ

女１ 私、ちょっと心配なことがあるんですけど

男１ 何？

女１ あんなに注文したら食べきれないんじゃないかと思って

男１ そうだね。僕も心配なことがあるよ

女１ 何ですか？

男１ あんなに注文したら２万円じゃ足りないよね

女１ そうですね

男１ どうしようか。会社のメンバー呼ぼうか

女１ 私、声かけてみます

男１ 若手だけでよろしく

女１ もちろんです。先輩のおごり、でいいですか？

男１ いいよ

女１ ありがとうございます

男１ デートのつもりだったけど、まあいいか

女１ 先輩。次は２人きりで、またご飯連れてってください

男１ この店以外ならいいよ

女１ はい

 終わり。